

北大史学会会報
史 筵 20

2022.12.22

彙 報

◎ 二〇二二年度大会（二〇二二年七月三〇日）

コロナウィルス感染防止のため、大会はオンライン形式（Zoom）で開催されました。

【研究報告】

- 木村 由美「樺太恵須取町から北海道への引揚げ」
末森 晴賀「海賊」をめぐる17世紀オスマン朝―ヴェネツィア間の海上秩序―アフトナーメ・勅書の分析から―」
田村 理「フェミニズムは人権論を復権させたか―ジョセフィン・パトラの伝染病法廃止論（1870―74）再考―」
中澤 祐一「黒曜石水和層法…研究の現状と課題」

【講演】

- 高鳥 廉（日本史学研究室）
「室町期における尼僧の活動と足利将軍家―光聚院・広慶院の事例から―」

◎ 二〇二二年度総会（二〇二二年七月三〇日）

大会に引き続いて開催された総会で、北大史学会の委員・会計監査が以下のように選出されました。

【委 員】 権錫永、川口暁弘、村田勝幸、吉開将人、國木田大、

高鳥廉、コジエブニコワ・ダリア、富士貴央、長瀬篤

音、許開軒

【会計監査】 白木沢旭児

次に二〇二二年度の会計報告が行なわれ、以下の通り承認されました。

I. 収 入

前年度繰越金

一、三〇四、八一〇円

二〇二二年度収入

四〇九、〇〇七円

（内訳）

会費

三七六、〇〇〇円

広告代（北大出版会）

五、〇〇〇円

会誌販売代金

八、〇〇〇円

寄附金

二〇、〇〇〇円

銀行口座利息

七円

合計

一、七一三、八一七円

II. 支 出

二〇二二年度支出

三〇八、八一三円

（内訳）

『北大史学』六一号・『史筵』一九号出版費用

（印刷代〔含・抜刷代〕および振込手数料） 二七六、二一〇円

郵送費（『北大史学』・会費請求書等） 一九、九六八円

交通費〔北大史学〕発送時のタクシード代 二、三三〇円
ホームページ用サーバーレンタル料 八、〇八五円
事務費用（レターパック代） 二、二二〇円
次年度繰越金 一、四〇五、〇〇四円
合計 一、七二三、八一七円

◎ 二〇二二年度卒業論文・修士論文発表会 (二〇二二年三月一日)

コロナウイルス感染症防止のため、卒論・修論発表会はオンライン形式（Zoom）で開催されました。

【卒業論文発表】

関 凌我「陸軍教育総監部の研究」

新谷耕太郎「清代雍正年間河南省における耗羨の婦公と省経費」

立川ひかり「女性の権利」のグローバルヒストリーGHQの占

領政策と日本国憲法」

柴野 初音（考古学）「札幌市N434遺跡出土炭化種子の研究」

【修士論文発表】

渡辺 双葉「岩手県宮野貝塚出土動物遺存体の研究」

◎ 二〇二二年度博士論文・修士論文・学士論文題目

【日本史学研究室】

●博士論文

吉田 拓矢「日本古代における暦法の研究」

●修士論文

後藤 優「労働者年金保険法の創設意図」

吉田のどか「宋慶齡の女性論」

【西洋史学研究室】

●修士論文

今野 翔太「コンスタンティヌス朝におけるローマ市首都長官」

●学士論文

青海 一太「クヌートのイングランド統治をめぐる諸問題」

浅倉 洸喜「リドレス運動期以降の日系アメリカ人を中心としたアジア系の連帯」

上田 万葉「古代ローマにおける女性の政治的・宗教的役割に関する考察」

尾形帆乃香「ハリウッドにおけるキャスティングと人種公正性」

佐藤 圭「ローマ皇帝ドミティアヌスの再評価」

志村 佳亮「ウィンドランダム板文書から考察するローマ帝国辺境

兵士の生活」

立川ひかり「女性の権利」のグローバルヒストリー」

中島 哲「アメリカにおける移民排斥と優生学の関係」

根来 朝陽「近代ロシア帝国の流刑制度」

古市 充「帝政期ローマにおける風州エジプトの地方エリート層」

山口 萌香「第一次世界大戦前後のセネガルにおけるフランス植民地統治」

山田 愛実「ポーランドの歴史認識論争」

【考古学研究室】

●修士論文

渡辺 双葉「岩手県宮野貝塚出土動物遺存体の研究」

コジエブニコワ・ダリア「第二次世界大戦後の南サハリンにおけるソ連人と日本人との共生」

張 啓正「日本の少年団運動―統後活動を中心に―」

劉 琮璇「誥命を中心とした日明外交文書の研究」

●学士論文

田中 峻太「日本古代の祥瑞年号」

清水 稜「群馬県の廃娼運動における民権運動家」

古田晴一朗「文化統治期の朝鮮におけるキリスト教」

葛西完三郎「第一期北海道拓殖計画と政党」

池崎 修平「明治初期開拓使工場の労働」

植田 健介「在満州日本人教育における「現地適応主義」

岡田 篤弘「後花園天皇の皇統に関する研究」

吉野 耕平「第一次世界大戦後の海軍軍縮と憲政会・造船業界」

高橋 和太「神仏分離と葬式―箱館を事例として―」

山西 駿世「平秩東作『東遊記』と天明期幕府の蝦夷地調査」

関 凌我「陸軍教育総監部の研究」

【東洋史学研究室】

●修士論文

内田 桜子「20世紀初頭のクレタ島問題におけるオスマン帝国の宗主権をめぐる認識―イギリスとの交渉を中心に―」

●学士論文

浅野 通彦「1930年代漢口における対外貿易と鉄道網の整備」

新谷耕太郎「清代雍正年間河南省における耗羨の婦公と省経費」

伊藤 大智「魏晋南北朝の呉興の豪族施氏について」

小島 一記「*Tezaki*から見るオスマン朝の近代警察機構の形成―1860年代のサブティエを中心として―」

●学士論文

中矢 流大「古代東北地方における宝相華文軒丸瓦の研究」

相良 琴美「北海道域からアムール川下流にかけての人体形造形について」

柴野 初音「札幌市N434遺跡出土の炭化種子の研究」

加藤 永理「礼文華遺跡出土恵山3式土器の技術論的研究」

◎ 研究室便り

〈日本史学研究室〉

二〇二二年春に大きな異動があった。二〇二一年四月以来日本古代史を担当してきた小倉真紀子准教授が宮内庁書陵部編修課皇室制度調査室に転出した。新たな役職は主任研究官という。報せを聞いてお別れの会を催すまでの期間が短くて、我々が実感をもてないままに、小倉先生は札幌を去った。来る者があった。高鳥廉助教の着任である。日本中世史を専門としていて寺院史に詳しい。我が研究室で学位をとった修士生がこうして戻ってきたことが嬉しい。以上の結果、日本史学研究室は教授四名、准教授一名、助教一名という構成である。

新二年生は一七名であった。一〇月一日現在すでに異動がある。自分のやりたいことが見つかって、それに邁進しようとの決意から去る者を、追う理由はない。残る者も去る者も、各自日々の研鑽に励むと良い。

今年度から対面での授業実施を原則とする、本来の形態に戻りつつある。相変わらず全員マスク姿である。他人と話す機会が長らく奪われてきたせいか、発声の弱い学生が多い。もっと下腹に力をこめて、滑舌よく話しなさい、と諭す教員も舌が纏れる。コロナ禍は

こうした点でも人間社会に禍をもたらしている。

学外の活動も再開しつつある。

谷本の近世史演習では、二〇二二年八月二日・九月一日の両日に、古文書調査を行った。感染症流行の状況に鑑み、附属図書館への「通い」で実施した。同館北方資料担当の御理解を得て、未整理文書(旧越後高田藩士旧蔵文書など)の調査に着手できた。今後の成果が期待される。

同九月には、白木沢と卒業生・上田哲司さん(学振特別研究員)との共同で、北広島市エコミュージアムセンター所蔵の阿部仁太郎(にたろう)関係資料の目録作成を行った。二〇一八年から始まって二年の休止を挟んだものの、約一千点の目録を完成させた。

また、本年九月は数年ぶりの集中講義があった。信州大学人文学部から山本英二先生をお迎えし、「近世の由緒と偽文書」と題した御講義をいただいた。近世に作成された実際の偽文書を御持参になつて行われた具体的な御講義に、履修者は知的刺激を受けていた様子であった。

この様にコロナ禍が続くなかでも、我々は活動している。早めに収束してくれば結構なことだが、そうでなくても工夫を重ねて我々は生きるばかりである。(文責・川口)

〈東洋史学研究室〉

本年九月現在、東洋史学研究室は、教員三名、大学院・博士課程五名、修士課程二年生四名、一年生四名、研究生二名、学部・四年生五名、三年生三名、二年生一〇名、学振特別研究員R.P.D一名、計三十七名で構成されている。

この一年間、コロナ規制が緩和されていく過程で、研究室には院生・学生の姿が少しずつ戻ってきた。ただし、研究室への進学直後

掲載予定であるので、『史筵』の読者の皆さんには積極的な参加を呼び掛けたい。

なお、今年度から研究室ホームページのURLは旧版から新しいものに変更されているので(<https://toyoshiechokudai.ac.jp/>)、注意をお願いしたい。(執筆担当：吉開)

〈西洋史学研究室〉

二〇二二年(令和四年)一〇月現在、西洋史学研究室に在籍する学生および研究員は、学部二年生が一名、学部三年生が二名、卒業論文提出年次学生が一八名、修士課程八名、博士課程二名、専門研究員一名、という構成になっており、大きな変化はありません。教員は、砂田徹、山本文彦、長谷川貴彦、松嶋明男、村田勝幸の五名(敬称略)が教育・指導と研究にあたっています。また、山本教授は、理事・副学長としてDX(デジタル・トランスフォーメーション)の業務を中心に担当されるなど、大学執行部の業務に尽力されています。

二〇二二年度は、新型コロナウイルス感染症(Covid-19)によるパンデミックの二年目にあたり、前途が依然として見えないなかでのスタートとなりました。ただ、そうしたなかでもほぼ全面オンラインで仲間と顔を合わせることができなかった二〇二〇年度とは違い、今年度は対面授業も少しずつ復活し、漸次的ではあれ重要な変化が観られ始めたように思います。なにより、西洋史学研究室(五一九号室)が賑わいを取り戻しつつあることが「平常への復帰」を予感させると言えるでしょう。

明るい変化の具体的なひとつとして、八月に修士一年生の山口萌香さんがストラスブール大学に留学するために渡仏されました。出国時や訪問先での入国時、さらには日本への再入国時に設けられて

に多くの機会を失った学年のなかには、残念ながら、研究室に溶け込むことないまま、あるいは外国史研究を専攻したにもかかわらず、自らの海外旅行・留学、留学生との交流などの経験を持たずに、卒業に至る者が現れそうである。コロナ禍は大学という教育・研究の場に、多大な影響を及ぼした。それを被ったのは、本研究室だけではなくそうであり、またおそらく本学だけではなく、わが国だけでもないと思われるが、私たちの学問への将来的マイナスイメージが強く懸念される。

そうしたなかで、今年度は前期から授業なども旧来の対面式中心に戻り、二年生進学者としても、研究室としては久しぶりに十名の大台に乗る新入生を迎えたことは、今後の体制立て直しに向けて、大いに朗報でもある。

また、いち早く準備を進めた博士三年生の高橋稜央君が昨年度にはスペイン留学に旅立ち、大学院留学生の新規受け入れも始まり(交換留学生受け入れ再開は未定)、さらに先ごろには佐藤健太郎教授がモロッコへの短期訪問を実現させたことを記しておく。院生仲間、学部生、さらに教員同僚に対し、コロナの状況から正常復帰に向かう上で、大きな刺激を与える出来事であった。外国史研究を専攻する私たちの研究室に、海外との関係においても、以前と同じような活気が戻ってくることを期待したい。

談話会もまた、対面式中心の企画に戻り、無事開催を重ねつつある。一方で、この間に苦肉の策として導入していたZoomによるオンライン方式も残り、ハイブリッド方式で実施してみると、遠方の所縁者の参加があつて議論も盛り上がり、近況確認などを含めて旧交を温める機会となることが明らかになった。おそらく今後の談話会は、可能な限りハイブリッド方式で開催し、益々の活性化を図ることになると思われる。開催情報は研究室のホームページに適宜

いたハードルがやっ取り除かれつつあります。思えば、研究対象国を直接訪れて一次史料等にあたるという、外国史研究者にとつての「当たり前」が失われた三年間でした。パンデミックが収束し、現地調査の実施と科学研究費の計画的な消化がいつそう容易になる日が早く訪れることを祈っております。(文責・村田)

〈考古学研究室〉

二〇二二年度の考古学研究室の構成員は、教員三名、博士後期課程二名、修士課程二名、学部生一四名の計二二名です。

新型コロナウイルスの影響がのこりつつも、対面での授業も開始され、豊浦町礼文華遺跡発掘調査(第十一回)も、ほぼ予定通り実施することができました(二〇二二年八月一九日~九月一日)。昨年まで中止せざるを得なかった現地説明会、礼文華小学校児童の体験発掘、礼文華遺跡での一年生向けの授業である一般教育演習(フレッシユマンセミナー)もようやく再開することができ、少しずつパンデミック前の状況に戻ってきています。とはいえ油断できない状況がまだつづいているなか、快く実習を受け入れていただいた豊浦町教育委員会・豊浦町役場、およびご協力いただきました豊浦町郷土研究会・礼文華地区の方々にあつく御礼申し上げます。

小杉教授は、かねて途絶えていた研究室発行の紀要の再刊を果たしました。本研究室の前々身となる北方文化研究施設の時代に刊行されていた『北方文化研究』の名跡に胡坐をかくことなく、新たに考古学研究室へと新生したことの自覚とともに、名称を『北海道大学考古学研究室研究紀要』としました。1号雑誌に終わることなく、毎号全所属教員が必ず執筆・投稿するスタイルを堅持してゆく所存です。昨年に引き続き世界遺産構成資産の史跡キウス周堤墓群整備委員会、史跡鷺ノ木遺跡整備委員会の委員を務めました。専攻

生をインタビューとして受け入れながら、科研の調査として開始した
礼文華遺跡（豊浦町）の発掘調査も二〇二一年度で一〇周年を迎え
ました。最終報告書の仕上げを目指して、日々出土遺物の整理・分
析に取り組んでいます。

高瀬教授は、コロナ禍で来日することができなかったドイツ、ア
メリカ、カナダからの研究者が次々と来日することとなったため、
その対応に追われることとなりました。それでも、昨年までとくら
べると出張に行きやすくなったことから、現在すすめている科研費
（基盤B）のプロジェクトで必要とされる動物骨のサンプリングを道
内各地で実施しました。また、これまで発表した論文をもとに『続
縄文文化の資源利用』（吉川弘文館）を上梓したほか、自らのフィー
ルド調査を通して千島アイヌがカムチャツカ半島から撤退する年代
を明らかにした論文が日本考古学協会優秀論文賞を受賞しました。

國木田准教授は、一昨年度から引き続き「土器の年代と使用法の
化学的解明」〔学術変革領域A〕の研究プロジェクトをおこなってい
ます。この研究は、「土器を掘る―二十二世紀型考古学資料の構築
と社会実装をめざした技術開発型研究」をスローガンに進めてお
り、今年度は土器の内部に残された炭化種実の年代測定に挑戦して
います。また、シブノツナイ堅穴住居群（湧別町）調査検討委員会
への出席や、令和三年度縄文遺跡群ボランティアガイド養成講座
（七月）、北海道立埋蔵文化財センター連続講座・講演会「縄文文化
はじまりの考古学」（三月）等を担当しました。

今年の考古学研究室からは学部生四名が巣立ち、それぞれ希望の
進路へと進みました。うち二名は大学院に進学し、研究を継続して
います。また、修士課程修了者が埋蔵文化財関係の専門職に就職し
たのも、研究室としてはうれしいニュースです。今後、北大での経
験をいかして活躍してくれることを期待しています。（文責：高瀬）